



TITLE:

<學界展望>甲骨學の新展開

AUTHOR(S):

小川, 茂樹

---

CITATION:

小川, 茂樹. <學界展望>甲骨學の新展開. 東洋史研究 1936, 2(2): 168-177

ISSUE DATE:

1936-12-15

URL:

<https://doi.org/10.14989/145577>

RIGHT:

## 學界展望

### 甲骨學の新展開

小 川 茂 樹

現代の支那に於いて正統歴史學界の寵兒として、最も多くのアカデミツクな史學者をその専門家として吸収してゐる分科は今茲に述べんとする甲骨學である。甲骨學

は新資料發現の結果二十世紀初頭に初めて呱呱の聲を揚げた新興の學問であつて、其の點に於て民國革命後世に出た前清內閣所藏の明清檔案の研究と相似の運命にある。民國十七年國立中央研究院歷史語言研究所が成立した時、その歴史組の事業として選ばれたのが明清檔案整理と河南省安陽縣附近の殷墟發掘の二工作であつた。王國維の没後、羅振玉も學界に遠ざかり、稍沈滞の氣味にあつた甲骨學界は、民國十七年秋に開始された殷墟の科學的發掘に於て獲られた甲骨其他の遺物の研究により甚

大な刺激を受けて、異常の活氣を呈し、幾多の新研究の輩出により急速な進歩の途上にある。

此の甲骨學の流行に伴ひ甲骨學史及び甲骨學文獻目錄の類は支那に於ては夥しく出版されてゐる。學史の類では、獨自の甲骨文字の新解釋を包含し甲骨學通論の如き觀あり、純粹に學史の形態を取らないが、古くは容庚の「甲骨文字之發見及其考釋」〔國學季刊一ノ四、(民國十二年)〕も之に屬し、後に甲骨學目錄を附する。王國維の「最近三三〇年中中國新發見之學問」〔民國十四年清華大學講演、學衡第四十五期(民國十五年)〕及衛聚賢編中國考古小史(民國二十二年)所收〕中の殷墟甲骨文字の項も斯學の建設者の自述として貴重すべきものがある。文

獻目錄の類では、先づ容庚の「金石書錄目」卷七（民國十九年初版、民國二十三年補訂再版）は單行本を主として集め、陳準の「殷契書目録」（圖書館學季刊六ノ一、及甌風雜誌一ノ七）董作賓の「甲骨文論著目錄」（北平圖書館讀書月刊二ノ七（民國二十二年））李星可「甲骨學目錄並序」（中法大學月刊四ノ四。（民國二十三年））は諸雜誌掲載論文にも及ぼし、更に陳振東の「殷契書錄」（民國十九年）によつて着手せられた解題提要の試みは、近くは邵子風氏「甲骨書錄解題」（民國二十四年）により膨大な一部の書となつて現はれた。分類目錄にして、多少の學史的用意あり、尙簡單な解題を附する競明「三十五年來的甲骨學」（考古、三（民國二十四年））も便利であるけれども、稍古いが董作賓「甲骨年表」（中央研究院集刊二ノ二（民國十九年））は甲骨を主とする殷墟遺物の發見發掘經過及び研究書出版を年表にして示したもので、甲骨學の發展の跡を大觀し得る好著である。

斯の如く彼の地に於て隆盛を極める此の學問に對して、嘗て甲骨學は勃興期に於て林泰輔博士の如き永久に甲骨學開拓者の一人として記憶せらるべき先覺を出し、又王國維の劃期的な殷先王先公考等の述作を逸早く紹介

し、その研究に暗示と鼓舞とを惜まれなかつた内藤湖南博士の如き碩學を出した我學界が、近來種々の理由から全く雲烟過眼視、或は白眼視し去つてゐるのは遺憾極り無い。僅に石濱純太郎氏の「殷墟學文獻小志」（龍谷史壇五十四（昭和九年））、同補（同十八、昭和十一年）があるのみ。近頃、長瀬誠氏の殷虛卜辭の書が出たが、中央研究院殷墟發掘以來の斯學の最近の動向に對して餘り考慮が拂はれてゐない。されば支那の甲骨學の一般についての概觀、或は文獻目錄は上掲の中日諸書に譲り、茲には主として民國十七年以後、特に董作賓氏を主導者とするの甲骨學の新展開に就て紹介を試み、我學界に閑却されてゐる斯學に注意を喚起したい。

河南省安陽縣附近の殷墟から出土する龜甲獸骨が始めて學者の注意を惹いたのは、光緒二十四五年の交（一八九八—一八九九）清末の山東の金石學者王懿榮が商賈の齎した甲骨上に文字の刻せられるを認め、之を寶藏したに始る。<sup>①</sup>甲骨の最初の收藏者たるの光榮は同時の著名な金石家端方に與へられるべきだと云ふ説もあるが、此事實の有無は暫らく措くも、蒐聚の甲骨が後の斯學研究の中心對象となり、斯學勃興の機縁をなした點に於て、王

氏の發見の方が特記せらるべきは言を俟たない。王懿榮は間もなく義和拳匪の亂に殉じ、その所藏甲骨は擧げて丹徒の劉鶚に歸し、劉氏は更に收蒐を續け、光緒二十九年（一九〇三）その甲骨上に刻せられた文字の拓本を撰擇影印鐵雲藏龜六卷を出版した。之が甲骨の廣く學界に紹介された權輿である。次で翌光緒三十年、當時の經學の耆宿瑞安の孫詒讓が専ら劉書を資料として、此等の龜甲獸骨上に刻せられた文字を解讀して、その文章が、古代の祭祀游獵軍族などをトつた卜辭であることを知り、契文舉例二卷の稿本に研究を示した。専ら殷墟出土の甲骨上の刻文を資料とし、先づ之を解讀し、更に諸方面から研究を加へんとする甲骨學の礎石は茲に置かれた。

清朝に於ける小學の一傳統を受け、又特に清朝中期以後より青銅器銘文たる金文を研究して、着々と業績を收め、既に吳大澂の説文古籀補により相當完備した先秦文字の辭典を有してゐる處の清末の金石學者が、金文に連絡類似的の乏しくない甲骨文字に接するや、驚喜して一途にその文字の解讀に専心したのは當然である。その間にあつて羅振玉氏の如き人をして殷墟遺跡を確かむるのみならず、民國四年身親しく實地を踏んで採收を行ひ、甲骨

のみならず、その伴出物にも注意を拂つて、銅器玉器石器彫骨の如き殷墟出土の遺物を集め、民國五年殷墟古器物圖錄を出版した。之は尙考古學的の嚴密な遺跡調査、或發掘とは云ひ難いが、兎に角當時にあつては非凡の着眼であり、後の中央研究院による科學的發掘の先驅をなすものであつた。

然し一般に文字を愛好する支那人の嗜好趣味及び上述清末の小學金石の傳統と相待ち、多くの學者は殷墟遺跡の調査或は遺物一般には殆ど無關心であり、又甲骨の研究に於ても、甲骨實物よりはひたすら甲骨上の文字のみに注意を向け、羅氏の「殷虛書契菁華」(民國三年)が特別に甲骨を寫眞印刷に附した以外は、前の「鐵雲藏龜」を始め羅氏の「殷虛書契前編」八卷(民國元年)「鐵雲藏龜之餘」(民國四年)「殷虛書契後編」二卷(民國五年) 姬佛陀氏の「戩壽堂所藏殷虛文字」(民國七年) 林泰輔博士の「龜甲獸骨文字」二卷(大正六年) 葉玉森の「鐵雲藏龜拾遺」(民國十四年) 王襄の「簠室殷契徵文」二卷(同)の如きは悉く拓本を影印せるもの、明義士の *Menzies* の「殷虛卜辭」 *Oracle Records of the Waste of Yin* (民國五年)の模寫影印せるもの、以上の主として文字の



拓本を資料として甲骨文字解讀に腐心した。

孫氏に端を發した甲骨文字考釋の學は、宣統二年林泰輔博士の「河南省湯陰縣發見の龜甲牛骨に就きて」（史學雜誌二十ノ八、九、十）の作に刺戟された羅氏が「殷商貞卜文字攷」一卷を著し、之を更に發展して民國三年「殷虛書契考釋」の書を成した。羅氏の書契考釋の書は書契前後編、菁華及び鐵雲藏龜に見えた卜辭につき解讀し得た處を綜合的に述べたものであり、孫詒讓により始められた甲骨解讀の學は一應完成したと云ふべく、以後の甲骨學は總て此の一著を出發點としてゐる。

王國維の論考「殷卜辭中所見先公先王考」「同續」「殷周制度論」（民國六年）「戲壽堂所藏殷虛文字考釋」（民國八年）が此の書の考史の部分たる都邑帝王人名地名諸篇に對する補訂であり、商承祚の殷虛文字類編（民國十二年）がその文字篇を説文の順序に配列せる如き、その他の羅氏の門以外の著述著作葉玉森の諸論文「殷契鉤沈」（民國十二年）「說契」「研契枝譚」（民國十三年）を始め爾餘の書何れも見方何等かの連絡を有する。羅王二氏等の論文中考史に關する部分は後に改めて論及するが、一先づ形式を備えた甲骨文字考釋の學は餘り進歩せず、羅氏が民國

十年考釋の補訂版を出した時にも、多少の補正と僅に引例の類を稍豊富になつた外その大綱は變らず、原著の引用書の葉數を削去した事などにより改惡と評せられた事によつても知らるゝ如く、民國十年代の學界は稍沈滯の狀態にあつた。之は拓本を通じて文字の研究のみに終止する研究法の固定の將來した缺陷であつたが、民國十七年以來中央研究院の殆ど毎年繼續して行つた殷墟の科學的發掘の直接間接の影響により大革新が與へられた。

殷墟發掘の結果に就ては、尙全班的詳細な報告が未發表である、第七回迄の結果は簡單ながら四冊の報告によつて公表されたが、殊に第八回以後、從前の發掘地小屯から少し距つた侯家庄附近の恐らく殷代の王墓と推定せられる巨大なる墳墓の發掘の結果は、今迄未知の豊富なる副葬品の發見となつたが、之に就ては傳聞するのみ、未だ公報に接し得ない。されば安陽發掘の全貌は未だ一般には窺知せられず、その考古學上の業績の評價は將來に待つべきであるが、最初より殷墟發掘の目標が甲骨にあつた爲、その發掘の結果は先づ甲骨學に現れた。<sup>④</sup>

民國十七年秋の第一回發掘の結果獲られた甲骨資料は董作賓氏により整理され、翌年「安陽發掘報告第一期」に

「新獲卜辭寫本」として模本が公にされた。殷墟出土の龜甲及び獸骨——主として牛の肩胛骨——は一個の完全な形で出土したものはなく、悉く大小の斷片、破片としてである。然し本來は龜甲ならば龜の完全な腹甲、或は背甲、骨ならば肩胛骨が其の儘に卜の用に供せられ、裏面に多數の穴を穿ち、そこに火を當て焦灼し、表面に生ずる裂目により事の吉凶を卜し、その問ふた事柄を表面に刻した文が甲骨文である。その各の卜辭は極めて短文であるが、一甲版一骨版上に其短文の卜辭が多數縱横に刻せられてゐる。されば、殷墟出土の甲骨斷片は極めて不完全な資料であつて、之を何等かの方法で接合復原する必要がある。卜辭の内容の研究に於ても單に斷片に現れた個々の短文の解讀より、更に進んでは完全な甲骨の大版にある多數の卜辭を綜合して考察すべきである。

既に王國維を始め甲骨學者達は時々斷片の接合を試みては居たが、董作賓氏は殷墟發掘の甲骨實物を手にし之を整理するに當つて、如上の必要を痛感したらしい。されば此の甲骨接合復原を系統的に行はんとし、先づ現在の生龜の形狀を調べ、之と比較して殷墟の龜甲斷片が龜甲の如何なる部位に相當するかを知り、かくして部位決

定された斷片を綜合して、龜甲に卜焦の施さるゝ方法を知らんとしたのが「商代龜卜之推測」(報告第一期所收)であつた。

幸にして殷墟第三回の發掘に於て、大連抗と稱する點に於て古代の害と覺しき深部より、滿面に卜辭を有する龜甲の殆んど完全な版即ち大版が四枚相重つて發見せられた。董氏はこの大龜四版の寫眞に考釋を附し、「大龜四版考釋」とし、中國動物學界の權威たる秉志に屬して現在の附近產出の龜殼を調査した「河南安陽之龜殼」と共に「安陽發掘報告第三期」(民國二十年)に發表した。

大龜四版の發見が甲骨學界にもたらした贈物の第一は上述の甲骨系統的接合の要求に對して原物により準則を提供する事にあるは云ふを待たない。

次に大龜四版の各卜辭は日の干支のみならず多くは月をも記してゐる。之は古代の曆法の貴重な資料を供給するものであつて、その日の干支及び月次より置閏法が問題となり、所謂「殷曆」を廻つた論争が展開されるに至つた事、本誌第一卷四號大島學士の紹介に詳しいから今は贅説を避ける。然も卜辭の一大版に錯雜して刻せられた各卜辭短文に於ける日月の記載は、この各卜辭の順序

を辿るを得しめた。焦灼は常に大版の裏面に左右に對照的に施せられ、卜辭之に伴ふものであつて、卜辭も左右對して同事をトする所謂左右對ト例がある。其他今迄斷片的資料により、左行右行定りない各ト辭短文相互の順序配例に法則を見出さんとした胡光煒の「甲骨文例」(民國十七年)の如き暗中模索に對して、根本的な指針を與へた。之によりト辭の各個の短文の連絡、前後の順序の法則を知り、甲骨斷片の部位判定、或は接合を容易にし、ト辭解讀に與ふる便益は多大である。更に之等にも増して大なる波紋を投じたのは、大龜四版の考釋に於て董氏の提出した貞人說であり、次で「甲骨文斷代研究例」(慶祝蔡元培先生六十五歲論文集(民國二十二年))は此の考を一層擴大發展せしめたものに外ならぬ。

董作賓氏の甲骨學に於ける革命的な研究を紹介するに先ち甲骨文の年代に關した支那學者の舊說を一顧しなればならない。始め劉鶚が鐵雲藏龜を出版した時、彼は商賈の言によつて、甲骨が河南湯陰縣の隔里城なりと序文に記した。劉氏は單に卜辭に見える祖乙祖辛等の人名により、之を殷代の遺物と定めたが、孫詒讓は此出土地を顧慮した爲でもあらうが、甲骨文字を兩周金文に比す

れば形聲字少く象形字多き點より、字體上周金文より古き文字であり、恐らく商代の文字ならんと信じつゝも、要するに商周間の文字なりとの留保を附せざるを得なかつた。<sup>⑤</sup>同様にして卜辭に見える祭祀を受ける祖乙・祖辛・祖丁等の十干を以つて名とせる人名に就ても、直ちに史記殷本紀等の殷の帝王と一致せしむることを躊躇したのであつた。<sup>⑥</sup>

甲骨の出土地が河南省安陽縣附近の小屯なることを知つた羅振玉氏は、「商貞卜文字考」及「殷虛書契考釋」に於て此地が殷代末期武乙、文丁、帝乙三代の帝王の都であるとの説を提唱し、「考釋」に於ては卜辭に現れ來る大乙、卜丙以下の人名を史記殷本紀の殷王名と一致せしめ、甲骨が殷代の王者の祭祀をトした殷代の遺物たる事を確めた。

王國維は羅氏の此の考説から出發したが、古本竹書紀年の説により殷墟は盤庚以來殷の滅亡に至る迄十一王の帝都なりと考へた。又その著先王先公考及同續、後に之を纏めた「古史新證」(民國十六年)に於て、博く證を取つて、大乙以前、夔・土・王季・王亥・王恒・上甲等の殷王の上世及列王を求め、史記に見える商一代の帝王三

十帝中二十二帝迄を卜辭の祭祀記事に見出し、かくして殷虛の甲骨が殷の先王の祭祀を卜した王室の卜官の残した遺物なることを略明瞭にした。王氏の此等の論攷は着眼の巧妙立論の該博を極め、甲骨學に於ける不滅の文獻である。

董氏は之により甲骨は凡そ殷中期以後十一王の間の遺物なりとすれば、その間に時代の經過に伴つて甲骨文にも字體その他相當の變化の有るべきを思ひ、已に「新獲卜辭寫本後記」に於ても、二三の文字に就て著しき變遷を跡づけたのである。この甲骨の時代を何等かの方法に於て分別せんこと、又理論的な董氏の抱いた願望であつた。王國維は先公先王考に於て、先王稱謂法を論じて、一辭中に「父甲父庚父辛」を祭るを卜した文は、陽甲・盤庚・小辛三代相次いで兄弟繼いだ後に小乙の子として相續した武丁の時代の卜辭なるべきを論じた。王國維は此の被祭先王の稱謂による甲骨の年代確定の道を暗示しつつ、自らは一般に應用しなかつたが、董氏は之を極端迄に應用した。此先王稱謂法應用は別に貞人を手掛りとするものである。

卜辭中に例へば丙寅卜賓貞、翌丁卯之于丁の如く某某

(干支)卜某貞云の文が習見する。ト貞間の某は多く一字であつて、従前は或は官名、或は地名と解し、定論が無かつた。他の「ト在向貞」、「ト在潢貞」の如き潢、向が地名である場合と明らかに相違してゐるから地名ではない。大龜四版には勿論此の文例が多く現れ、大龜四版は全部ト旬即ち旬の末日に次旬の吉凶を卜するの辭であり、然もト下貞上某字は賓以外六異字があり、事類とも考へられない。卜辭の「王ト貞」「ト王貞」の文例があり、之を王の親トとし、上例を王の命じた貞人の名と解すべきであると主張した。董氏は後「帚矛說」安陽發掘報告第四期(民國二十二年)に於て、獸肩胛骨の骨臼の部に刻せられた文章は内容よりして卜辭ではなく、王より矛を臣下、或は地方に發給した記事の文であり、――之は最近は必らずしも記事文のみでないとする唐蘭の反駁(國學季刊)があるが――その内に所謂貞人と同字が多く發見されるから貞人は單に卜官たるに止らず、又史官であると説いてゐる。

若しト下貞上の一字が貞人即史官名なりとすれば、貞トを實際に行ひその卜辭を刻した貞人の名により、卜辭の時代が定められる。特に大龜四版の如き大版には多數

の異なる貞人が現れるが故に、之等の多數の卜官が同一時代に屬するを知る。此同時代人組み合せを多くの卜辭に求め、之と前述の王國維の見出した先王稱謂による年代決定と結合させるならば、茲に諸の貞人の時代決定が出来、この貞人を標準として、多くの卜辭の時代が決定出来るであらう。董作賓はかくして、賓・韋・亘等十一人を武丁時代、大・旅・即・行・兄等六人を次の祖庚・祖甲時代、彭・兪等四人を廩辛庚丁時代、貞人名を全く記せざる武乙文丁時代、王親卜時代の帝乙帝辛時代との五期に分つた。

「甲骨文斷代研究」は以上を根本として、尙坑位、即ち殷墟よりの甲骨の出土の狀態の關係、或十干十二支を始め文字の字形の變遷、或は卜辭に使用せられる吉凶を記する慣用句その他用語の差違、又刻せられた文字の書體の變化等が、悉く此の貞人先王稱謂を標準とする五期區分に適合することを、多くの實例を擧げて説明してゐる。董氏は之によつて甲骨文は正確に時代が決定され、年代的に五期の檔架に分ち整理されたと自稱し、顧頡剛氏の所謂古代の檔案たる甲骨文の研究はその第一歩の工作を踏み出した。

董作賓氏の最初の「大龜四版考釋」に於て貞人説を提唱した當初、その卜下貞上の一字が卜人名なりとの論證は上來の引用にも見らるゝ如く極めて不完全であり、確實な證據を有せぬ推測に過ぎなかつた。されば之に疑問を抱くもの瞿潤縉氏の「大龜四版考釋」(質疑燕京學報十四)陳君憲氏の「貞人質疑」(國立中山大學文史學研究所月刊二ノ一)の如きを續出した。瞿氏は卜下貞上の一字は、貞人名に非ず卜の兆の名稱ならんとし、陳氏は卜辭は王事にして史官と官の名を記する故なしと論じた。

然るに董氏の大著「甲骨文斷代研究例」が出るに及んで、その稿本を贈られた郭沫若氏は一讀その所論に服し直ちに貞人二三を補充して、印刷當に成らんとする「卜辭通纂」序文に絶賛の辭を述べたを始め、吳其昌氏も「殷虛書契前編解詁」(文哲季刊二ノ一)に於いて貞人説を其儘採用してゐる。昭和九年筆者が北平で一夕在平金石學者、唐蘭、徐中舒、劉節、吳其昌の諸氏に面悟した際に董氏の大著に對する意見を求めたが、一座共に董氏の説に賛成なる旨を答へられた。

甲骨文編の著者、孫海波氏が「甲骨文斷代研究」中の謬説を訂して「卜辭斷代之探討」の一文を草するの意あり

と云つたが、「燕京學報十七」、「卜辭歷法小記」中の記事による」今に至るも尙その公表に至らない爲に、所謂謬説が、董氏の論文の根本なる缺陷を指すのか、然らずして部分的の問題に止るか詳にし得ない。「甲骨斷代研究例」の極めて大膽な研究法、然も多岐に亘つた議論は細部の甲骨文資料の使用、或は解讀の際に少からぬ缺點を藏してゐることは董氏も自認する處であらう。然し凡そ、或る新學説、殊に新研究方法の當否は、單なる蓋然

的な論議、或は新學説の論證の方法、の細部理論構成のみの批判では決せられぬ。窮局にはその研究方法が、果して實際に適用して多産な學的成果を擧げ得るか否かに重點が係つてゐる。王國維氏の殷先王世系の研究が、近出の甲骨資料に徴して益々確證され行くが如きはその適例である。董氏の「大龜四版考釋」に提出した「貞人説」は「斷代研究例」に於て甲骨文斷代研究の基準となり、字形、文法、書體其他の多方面の實例に即して極めて豊富な結果を得、又多くの一流の甲骨學者が之を應用して好果を得てゐることに徴して、甲骨斷代整理の方法として極めて多産的であることは否めない事實である。その貞人説の批判は甲骨整理の方法として適切か否かに重大問

題があるが、同時代の貞人群は、多くの既發表或は新出の甲骨に於ても常に共在し、別時代の者が混在する例は尙提出されてゐないし、先王稱謂法との連絡に關しても、金祖同が指摘した二三の點を（殷虛卜辭講話）除いて、尙全面的矛盾を摘發した者あるを聞かない。卜下貞上の一字が兆なりとする翟氏説の如き、大龜四版以外に廣く適用し得るか、その後の所論を見ないが、その不通の説たるは明らかである。

已に述べた如く現代の支那甲骨學界は極めて多事であり、新論文の雜誌等に登載せられるもの陸續として、全般に亘つて紹介することは限られた紙面では不可能である。本文には王國維氏の没後稍沈滞した學界に、一の大衝動を與へた董氏の「貞人説」「斷代研究」の試みを中心として論じた。現代の甲骨學は一面に於ては新論著の汎濫により全般の見透しが困難な爲、新に此の道に入らんとするものを困惑せしむるが如く見える。然し他面に於ては、好參考書の續出によつて、その學習は非常に容易になつたと云へる。光輝ある先覺者を有する我學界が、水に入らずして水泳を學ばんとするの愚をなさず、成心と行き掛りを捨て、研究を行へば、斯學の隆盛一朝

に期すべきものがあらう。董作賓氏の斷代研究法の如きも異日我が學界に於て、更に根本的な檢討が爲される日があらう。その方法の當否は問題としても、現代の甲骨學は此の研究法を閑却することは許されない。凡ては之から發足せねばならない。此筆者が匆忙の際短時に禿筆を呵した微意である。

(十一月十八日稿)

### 註

- ① 王國維殷虛書契文字考釋による。
- ② 前掲董作賓「甲骨年表」所説。
- ③ 羅振玉の「五十日夢痕錄」〔雪堂叢刻所收〕はこの見聞録である。
- ④ 殷虛の發掘の最初に於てすら、尙支那考古學者は殷虛遺跡自身の科學的發掘を行ふの計劃も意志も有せず、單に甲骨の發掘のみを念願とした。之は安陽發掘報告を讀めば直ちに了解し得る處であり、又李濟氏も自認してゐる。〔中央研究院歷史語言研究所專刊十三、田野報告序〕民國二十五年〕
- ⑤ 鐵雲藏龜自序。
- ⑥ 孫詒讓「契文舉例叙」。
- ⑦ 同上、鬼神第四。

### 追記

本論文脱稿の際註⑦引用の「中央研究院田野報告」を手にし、董作賓の「安陽侯家莊出土之甲骨文字」の篇の收めらるゝを見た。その輪廓は氏の「我在最近」(考古第三期)で

已知の處であつたが、侯家莊新出土の大龜七版の考釋で、新に第三期第五期の貞人の資料を増加した。その紹介は他に譲る。

### タカチ氏の講演

今春來日本滞在中のブダベスト、フランツ・ホツ博物館長フォン・タカチ氏は、十月廿六日夜京都獨逸文化研究所に於て「アルベルト・フォン・ルコツク氏の中央アジア發掘と、その東西兩アジア藝術史に對する意義」と題する講演を行つた。その要旨は古い中央アジアの藝術にはギリシア・イラン等の西方的要素が濃厚に現れてゐたのであるが、九世紀以後になると逆に東方の支那藝術の影響が強く現はれ出るに至るといふのであつて、ツルファン附近で發見された數種の壁畫に用ひられた手法は全く唐の吳道子のそれに發源するものなる事を幻燈に依つて仔細に説いた。

なほこの講演に先だつて羽田博士の故ルコツク氏の追憶談があつた。

(藤枝記)